

最優秀賞

母の笑顔から広がる心の輪

埼玉県立伊奈学園中学校 3年

針貝 怜和

私の母は地域の小学校で「あおぞら学級」という特別支援学級の子どもたちと一緒に過ごしていました。そこでは、発達のペースが違ったり、体の動きに不自由さをもっていたり、学び方が一人一人異なる子どもたちが集まっています。母は毎日のようにあおぞら学級での出来事について笑顔で話してくれます。その時の母の表情はとても輝いていて、聞いている私の心まであたたかくなります。

私は最初、母がそこまで嬉しそうに話す理由が分からないところがありました。学校の総合学習で障害をもっている方から話を聞く場面がありました。そこで、障害を持っていると周りの目や反応も、普段の生活も苦労すると言っていました。そのことを聞いて大変さを知っているからこそ、障害のある子と一緒に過ごすということは大変なことの方が多いのではないのかと考えていたからです。けれども母は「大変なことももちろんあるけれど、それ以上に子どもたちの一生懸命な姿から元気をもらえる。」と言います。母の言葉から、私もその世界に興味を持ちました。

ある日、母が学校に仕事で必要なものを取りに行くために、私も一緒に校舎に行くことがありました。そこで偶然、あおぞら学級の子どもたちに会いました。そのなかで私は一人の男の子が印象に残っています。その子は物事を集中してこなすのが少し苦手らしく時間がかかってしまうのですが、母に教わりながら最後まで諦めずにやるべきことに挑戦していました。そして終えた瞬間、彼は誇らしげな笑顔を見せました。その表情を見た母もまた満面の笑顔で「よく頑張ったね」と声をかけていました。その光景を見て私は「努力の喜びは誰にでも共通するものなんだ」と強く感じました。

私はそのとき初めて、障害がある人となない人の間に壁を作っていたのは、実は自分自身そして、社会全体だったのではないかと思います。会ったこともないのに「大変そう」「自分とは違う」と決めつけてしまっているのではないかと思います。でも目の前で一生懸命に頑張る姿や、それを笑顔で支える母の姿を見たとき、その考えは大きく変わりました。「ちがいはあるのは当たり前で、むしろその違いがあるからこそ、お互いに助け合い、認め合えるのだと気づいたのです。実は違いを強く感じさせてしまっているのは周りの社会全体や一人一人の行動から来ているものなのではないかと感じました。そこから私は、障害がある人ない人の違いは、苦手なことと得意なことの違いにすぎないと思うようになりました。例えば学校で私達は普段わからないところを教え合ったり、得意なことを披露したりしています。あおぞら学級の子どもたちも同じで苦手な部分はあってもそれぞれに得意なことや輝ける瞬間が必ずあると思います。母がよく「その子らしさを大切にしたい」と言っている意味が、今ははっきり分かる気がします。

私は障害がある人となない人が自然に助け合い、笑い合える社会こそ、本当にあたたかい社会なのだと思います。そのためには、まず自分が変わらなければいけません。困っている人を見かけたら声をかける、違いを怖がらずに受け入れる。そして、違いを恐れずに助け合う。それは小さな一歩かもしれませんが、そうした一歩一歩が私たちの「心の輪」を少しずつ広げていくのだと思います。

母は子どもたちと過ごす中で自分も成長しているのだと言います。私はそんな母の姿をととても尊敬しています。そして、私自身も誰かに寄り添い、その人の笑顔を引き出せるような人になりたいです。母が広げている「心の輪」を、私も未来につなげていきたいです。あおぞら学級の子どもたちと母から学んだこの気持ちを胸に、私はこれからも人との出会いを大切にしていきたいです。